

北区「WA（わ）のこころ」創生講座 第1回「現代社会と生け花」

メインパーソナリティー：能楽師観世流シテ方 河村 晴久 氏

ゲスト出演者：華道家元池坊次期家元 池坊 専好 氏

動画時間	字幕
00:00:05	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>皆さんこんばんは。</p> <p>北区「WA（わ）のこころ」創生事業と佛教大学オープンラーニングセンター共催による文化庁京都移転記念「北区 WA（わ）のこころ創生講座」文化の WA（わ）を始めさせていただきます。</p> <p>今日は、「現代社会と生け花」というタイトルでございます。</p> <p>初めにコーディネーターを務めます私、河村晴久でございます。</p> <p>どうぞよろしく願いいたします。</p> <p>私は案内にも書いていますとおり、能楽師観世流シテ方、600年の伝統芸能であります「能」を舞い、謡うのが仕事でございます。</p> <p>古典芸能、こういう伝統芸能に携わる人間でございますが、舞台を務めるとともに、これをどう発信するかということに興味があり、海外へまた若い世代の方々へとそれを発信しております。</p> <p>そして、今日はゲストに華道家元池坊次期家元でいらっしゃいます池坊専好さんをお招きしております。</p> <p>どうぞよろしく願いいたします。初めに、自己紹介ご自身でお願いできますでしょうか。</p>
00:01:18	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>はい、ありがとうございます。ただいまご紹介いただきました華道家元池坊の池坊専好です。</p> <p>華道家元と付いておりますのは、池坊という流派が最も古く派生した流派ではないという意味で、古く、元々の起源であるという意味で、華道家元と言われております。</p> <p>京都の中京区にあります六角堂で、花を立てられたところから流派が始まり、そして私もそこで仕事をしております。</p> <p>ずっと、この北区の「WA（わ）のこころ」とてもすばらしいテーマだと思っております。</p> <p>今日は生け花という、普段私が関わっております生け花という世界から、WA（わ）とはどういうことなのか、またそれがどういう形で、見える形で表現されているのかなど、お話をできたらと思っております。</p> <p>どうかよろしく願い申し上げます。</p>
00:02:21	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>この「WA（わ）のこころ」創生事業でございますけれども、WA（わ）の部分が、ローマ字になっています。</p> <p>これは、色々に解釈していただこうということで、この日本を表す WA（倭）でもあり、</p>

平和を表すこの穏やかに繋がる WA (和) でもあり、それから繋がるリングの WA (輪)、環の WA。

色々な WA (わ) をそれぞれに思い浮かべていただければという意味の名付けです。そしてこのシンボルマークもハートと W と A が入っている、こういうシンボルマークを作っております。

それこそ、お花にしても、能にしても、日本の伝統文化、まさに WA (わ) の日本の文化なのですが、最近の生活の中でどうも日本の文化に触れていただく機会が少ないと。

せっかく日本の文化があるのに気づかずにおられるのはもったいないので、この北区の中に色々なすごい方がおられる、すごい物がある、歴史のある寺社仏閣があるということで、そういう方々などと連携して、まずは皆さんに足元の文化を気づいていただき、振興していこうではないかということで、北区役所に「WA (わ) のこころ」創生ネットワーク会議を作ってくださいまして、私が座長を務めさせていただくことになりました。

神社、お寺、各大学、佛教大学さんもちろんそうです。そして、池坊さんなどの文化関係者。お茶、お花、香道、色々な方々に寄っていただいて、地元の方々にどう発信するか、慣れ親しんでいただくかということで、まずはそのお寺や、神社を訪問して参拝して、その中を見せていただく、体験させていただく、お茶の体験もさせていただくというのを実施して参りました。

そして、昨年度は、ラジオミックス京都を通して色々な方々にお出ましいたできて、日本の文化について詳しいお話を聞くと、なかなかこう触れることのできないお話を聞かせていただくことができました。

そして、今年度は佛教大学さんと一緒に、色々なゲストの方をお招きして、「WA (わ) のこころ」のお話を聞かせていただくと、これが足掛かりになって、皆様にこの日本のこと、繋がること、色々な関係、穏やかなこと、そういうことをこう感じていただけたらなという、そういう企画で始めさせていただいております。

前置きが長くなりましたが、今日は「現代社会と生け花」ということで、色々なお話を伺いたいと思いますどうぞよろしく願いいたします。

00:05:19 <池坊専好氏>

よろしく願いいたします。

00:05:20 <河村晴久氏>

生け花、お花を生けられているということですが、まずはその歴史的なことから、生け花というのはどういうものかお話をお願いしますでしょうか。

00:05:32 <池坊専好氏>

はい。生け花と言ったら、わからない方は多分いらっしゃらないと思います。

ただ、昔のように、皆さんが多くの方が生け花をやっているという環境では、なくなりつつあるのかなど。そして、どちらかと言いますと日本の生け花、日本の美意識が現れた生け花というよりは、壺にたくさんの高価な花を盛って飾るような、西洋的なアレンジメントという方が、普段見ることが多いのかもしれない。

生け花というのはもともと仏前供花、仏様に花を盛って荘厳するということですね。

この荘厳するものというのは、花だけではなくて、実は香り。香炉によって焚かれた香りであったり、それから蠟燭の灯り。灯りというのは、暗闇を照らし、正しい道に導いてくれるものですので、その中の一つとして花があったわけです。

その仏前供花として始まりましたのは、聖徳太子がですね、うちの実はお寺（六角堂）は聖徳太子によって建立されたと言われているんですけども、その聖徳太子が遣隋使として、小野妹子を派遣するんですね。

小野妹子が当時の、もう国際都市、先端都市の隋で、色々なことを学んで帰ってきて、その仏教とともに、文化的な習慣である「花を持って奉る」という、それで花を生けたのが生け花の始まりと言われております。

ですから「池坊」というのは、そのところに池がありまして、池のところにある、お坊さんが住んでいるところ、そこに花生けの名手が出たということで、代々そのところが、花生けを担当するようになったわけですね。

生け花というのは、住宅に床の間ができたことによって非常に大きく、より具体的に、そしてより規則ですね。ルールを持った構成を伴ったものとして、成立してきますし、それからまた時代に応じて、かなり変わってきているんですね。

例えば、戦国武将たちの時代というのは非常に大きな立派な花がもてはやされて、またそういった広い空間に合うような花が生けられていました。

また、江戸時代に入ってくると、町人層が経済的に豊かになってくると。そうすると、より沢山の人が、気楽に花を生けられるということで、「生花」という様式が出たりしまして、本当にその時代とともに、またその時代のニーズに合わせて、様々な花の生け方が生まれてきました。

ただ、その出発点は仏前供花であると。そして、昔は今のように何でも科学的に解明されていませんから、昔の人というのは花を仏様にお供えすることによって、自分の願いや思い、例えば家族の健康であったり国の安泰であったり、おそらく「草木」というのは人の生活に一番近い存在だったわけですよ、同じこの世に生きとし生けるものとして。ですから、自分の思いを込めて、花を立てる、今は生けると言いますがけれども、本来、花は立てるものなんですね。

立てるっていうのはどうしてかという、「依り代」という性格もありますし、「草木」というのは元々寝る性質じゃなくて上に伸びていこうとする、立ち上がる性質がありますので、その頃は、いろんな生き方を総称して、立てるというしていたわけですけども、生け花は仏前供花が出発点だということを、心に留めていただけたらいいのではないかなと思います。

00:09:47

<河村晴久氏>

生け花は仏様とともにずっとあったんですね。

昔、それこそ世阿弥に色々なことを教えてくれた京極 道誉（佐々木 高氏）の大原野の花見で、生きた木に壺を置き、生けたという（エピソードがあり）、何かスケールが今と違うことをなさってましたね。

そして、やはりその仏様の前から生活の場にだんだん取り込まれていくと、今の形に。

00:10:18

<池坊専好氏>

そうですね。仏様の花から人をおもてなしたり、人の居る空間を楽しんだりとか、そういう人のための花というふうには、変わってくるんですけども、時代に応じて、その生け方であったりとか、ルールがたくさんできて、またそのときの社会の状況によって、花型も変わってくるんですけども、実は何が生け花の肝と言うか、根幹にある考え方は何かといいますと、専応口伝というものなんです。

これ、大体16世紀ぐらいのものでして、この考え方を、今の池坊の私たちは、今も大切に、これを生け花の考え方・心であるというふうには、捉えています。

では、生け花って何だろうという話になるんですけども、実はここにちょっと文章書いてあるのをご覧いただけますでしょうか。

これは「専」という字がつくんですね。これは初代の小野妹子が住まいを改めまして、専門の「専」に「務」と、事務の「務」として、専務としたところから初代と数えてるんですが、この専応口伝の中にですね、花を挿すことは昔からあるけれども、美花のみを称してと書いてあります。すなわち、私たちが一般に言う「あの花は綺麗ね」とか、「美しいわね」という、そういう、その美しい花だけを称賛して生けるのは生け花ではないと言ってるんですね。

草木の風興という言葉がありますけれども、草木は一体どういう自然界の中で、どういう状態で、どういう状況で咲いているのか、その個性ですね。そういったものを理解して生ける、生かすのが生け花であるということを言っています。

ですからよく生け花というと綺麗な花を盛り合わせたり取り合わせたり、そしてそれをご覧になった時、「綺麗ね」という言葉をいただくんですけども、その綺麗さ、美しさっていうのは、私たちがこう目に映る、例えば形が整ってるとか、色が鮮やかであるとか、そういうのを指して綺麗と、私たちは美しいと思ってるわけじゃないんですね。

生け花人にとって美しいというのは、草木が、本当にどんなときも生きている。その命そのものが美しいというふうになるわけです。

ですから、どういう花を行けるかどういう作品を生けるかと言いますと、次のような作品になるんですけども、ご感想をございますでしょうか。

00:13:11

<河村晴久氏>

枯れた花にも、華がある。その生きようそのままが美しいということなんですね。

00:13:22

<池坊専好氏>

通常ですと青々とした綺麗な、緑ですとか、それから花が綺麗に咲いてるところとか、多分、ちょっと黄色くなってしまったというのは、お花屋さんの商品価値とするとほとんど売れないっていうんでしょうかどちらかという、もう捨ててしまわざるを得ない。そういう判断を下される状態だと思うんですけども、でも生け花では、これも命の一つの姿なんですね。葉が芽が芽吹いてから、だんだん緑が茂ってきて、そしてでもいつかは必ずこの黄色くなって、茶色くなって朽ちていくわけです。

花も、蕾から、開花になって、そして実がなったり、まだ中には葉が、花が散るものがあったりして、でもそれはどれが綺麗とかいうのではなくて、どの段階も、大切であり、

<p>00:14:40</p>	<p>貴重であり、美しいんですね。それは、本当に命の一つの、その状態を表してるわけです。</p> <p>ですから、私たちが一見ここで枯れてしまったなっていうふうに見えるような花にも、ほんと命の輝きがあるというふうにして、枯れた花にも華がるという言葉、この考え方を大切にしています。</p> <p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>女性の美しさを描く能はたくさんあるんですけども、能の中で一番難しい最高位になるのは老女なんですね。それは若い女性が美しいのは当たり前だと思いますけれども、老女っていうのは1番の能を描く世界のところのすごいところなんですね。</p> <p>或いは。桜の精で出てくると、若い女性が当然なんですけれども、そういう能はあるんですけども、そのもう枯れ木のを、この花が散れば命が終わり、老木の桜っていうのはまだ能のテーマなんですよ。やっぱり通じるものございますね。</p>
<p>00:15:17</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうですね、能の世阿弥の言葉でしたっけ花というね。</p>
<p>00:15:24</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>花こそ一番大事な認識なんですよ。</p>
<p>00:15:29</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>ですからそういった意味では、通じる場所があります。実は、今、能の話をおっしゃってくださいましたけど、生け花が出る能の演目も、「半蔀（はじとみ）」という。</p>
<p>00:15:46</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>これは演じる度にお世話になるという。</p> <p>去年のこの、こちらの「能への誘い」の講座。紫野のオープンラーニングセンターがオープンしたのを記念して、ここのご近所のことを取り上げたときに、少し東の方にあります雲林院というところが舞台になるので「半蔀」を取り上げさせていただきました。</p> <p>源氏物語の夕顔の巻なんですけれども、雲林院のお坊さんが、夏の間、法要していると。そのときに仏様にそれこそお花を奉るんですね。</p> <p>その法要が終わったので、これそのお花の命をいただいて、その仏様に備えたわけだから、お花の供養をするんですね。すると女性が現れて、その花の中の白い花を、夕顔の花なんですね。どうしてその夕顔の花というと五条辺りへおいでっと言って消えていく。お坊さんが五条へ行くと、源氏物語の夕顔の霊が現れて、源氏との出会いを物語るといものなのですが、今ちょうど写真出させていただいてますように、そのお仏様に、能を奉る場面で、池坊さんの立花、花を立てていただいてそれで能を演じると、これは江戸時代になって確立してきたものではあるんですけども、こういう演出で本当に立花をしていただくという、これは完全に池坊さんの申し合わせできるので、その度にお世話になりますんですけども。</p>
<p>00:17:24</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>通常は、花も作り物だったりしますよね。</p>
<p>00:17:29</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>はじとびは、通常は花出さない。</p>

00:18:03	<p>その半蔀をした家の作り物っていうんですけれども、大道具と言っても簡単なものですけれども、それを出すだけなんですけれどもね。</p> <p>この立花供養になると、こうして作るという、通常は大道具がほとんどなくて、無くても想像してくださいという世界が、この曲に限っては、立花を出していただくという、それが特色です。</p> <p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>こちらも、とてもなかなか、能舞台でお花を生けるっていう経験は、ありませんでしたので、また通常、私たちが生けてるのは違った本当に緊張感っていうんでしょうか。</p>
00:18:17	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>それは何か花を立てになる時に、こうするというふうな、いろんな思いというのはございますか。</p>
00:18:25	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>この演出で、途中で立花を出して引くときがございますよね。</p> <p>これ実はこう見てると、こう簡単そうに見えるんですけど、結構大きくてですね、重たいんですね。ですから、こう梯子のように、2人がかりでこう挟み込んで神輿のようっていうんでしょうか、そういうふうにしなながら、運んだりとか、あとやはり生ける時も皆様方にご覧いただきながら、生けておりますので、非常に緊張しながら。</p> <p>ただ本当にこの能の中にもたくさんの花にちなんだ、演目もございますし、それから狂言の世界でも、実は「真奪・心奪」というものがございまして、もちろんご存知でしょうけど、「心」というのが一番その生け花にとっては大切な枝なんですね中心な枝なんです。</p> <p>「心」にいい物が決まると、後々の作品が完成度が高くなるということで、ですからその「心」を奪い合うという、そういうのもありまして、きっとおそらく違う分野であっても、お互いにこう影響を及ぼしながら、こういう演目ができたりとか表現ができたりとかしてるのかなというふうに思います。</p>
00:19:49	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>いつの日かまた私も立花供養者になりたいなと思います。</p> <p>本当に良い能。洒落た能なんですよね半蔀というのは、本当に爽やかな能でございまして、本当に実際に花があると、花を添えていただくという、そういう舞台になって参りますですね。</p> <p>こういう、専応口伝もそうですし、能の世界では全部それみな室町時代に、こういうものが成立して参りますんですね。このやっぱり時代の特徴っていうものが、ございますでしょうかね。</p>
00:20:26	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうですね室町時代はいろんな今の日本文化の母っていうんでしょうか。</p> <p>いろんな文化が起こってきたところでもありますし、きっとそれぞれが特殊な発展もしながら、お互いに協力をしてきて、今の形になってると思うんですけれども、私はやっぱり日本文化というのを考えたときに、自然が与えた影響っていうんでしょうか。自然の中に人がいるからこそ、インスピレーションを受けたり、またそこで移り変わる風紀を見</p>

て、それを形にしたっていうのが非常に大きいんじゃないかなと思うんですね。

例えば、次にご覧いただくのが立花という生け方で、これは仏前供花から発達した最も古い、クラシカルな生け方なんですね。先ほどの半蔀の立花もこの立花というもので、ご覧いただくと、全部長さとか葉の状態とかが違うんですね。またそれぞれの茎と茎の間の空間も、大きいのがあったり小さいのがあったり、全部違うんですけど、それぞれが生き生きとして且つ、途中で倒れたりしないわけです。見た目はアシンメトリーなんですけれども、バランスは非常に取れてるんですね。

こういう立花というこの姿を見ただけでも、本当に全く違うものが、でもそれぞれが十分に自分の力を発揮しながら、でも調和を図ってるというところに、日本の文化の特質があるなと思いますし、それからこれ、実は立花というのは本来、先ほどの半蔀の中の作品のように、いろんな草木を使うんですね。なぜなら、自然の大自然の縮図だからです。でもこちらに一色と書いてありますね。こういう蓮だけで生ける、こういう特殊な生け方（蓮一色）もあるんですね。

この一色ってのは色っていう意味じゃありません。1種類のことを一色というんですけども、実はこれは蓮ということで仏教と縁が深いということもありますし、実は三世を行くべしって言われてたんで三世を表してるんですね。

つまり三世というと、「過去」、「現在」、「未来」になりますね。

「過去」はこの朽ち葉とか、連肉です。もう実になった部分。

それから、「現在」は、本当に綺麗にされてる状態とか葉っぱも開いてる状態。

そして「未来」は蕾です。巻き葉が、これ開いたらどんなふう綺麗に咲くんだろう、どんなふうになるんだろうという、こう期待を抱かせるのが、未来ということになります。

ですからこの立花という蓮の1種類だけの立花でも、これだけ本当にその時系列って時間軸が含まれてるんですね。

こういうことが、本当に限られた空間の中の限られた草木で生ける生け花の中でも表現できるということは多分、先人が自然を自然との景観が近くて、そして、葉がどういふふうに変わっていくのか、蓮の花がどういふふうに変化していくのかっていうのを、粒さに見てきたからこそできる表現だと思うんですね。

多分、昔の人というのは、葉が綺麗だなとか、花が咲いたなっていうだけじゃなくてその中に、まさに時間軸というんでしょうか。生け花はよく時間を生きるって言われるんですね。その物を生けてるんじゃなくて時間を流れてる時間を生けるって言われてるんですけども、まさに、こういったことも自然に近いからこそ、感じえた感性だと思います。

それから、例えば、風興というとき専応口伝の中で風興という言葉があったと思うんですけども、この風興というのも非常に重要でして。例えば秋になりますと、こういう紅葉した葉が非常に美しいんですけども、これも紅葉した葉が綺麗だからといって、たくさん使わないんですね。

寧ろとってもミニマムっていうんでしょうか、もう逆に葉っぱがもう1枚しかない、或いはこう、もう2、3枚しかない。だからこそより、もうこれから冬になって葉が散って

	<p>いく侘しきであるとか、物寂しきであるとか、そういうのをぐっと数が少ないからこそ逆にこう深く感じるというんでしょうか。そういうことを、私たちは表現しています。ですから、ただ単に「秋になったね」とか「葉が綺麗だね」っていうだけじゃなくて、本当にその中で、季節がどういうふうに移ろっているのか。命がどういうふうに変わっていくのかということ、感じるということ、を重要視します。</p> <p>それから、風たたきというのがあるんですね。これはあの芭蕉の葉です。置物でもね芭蕉布とかありますけれども、これをよくご覧いただくと葉っぱが破れてるのわかりますでしょうか。</p>
00:25:45	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>芭蕉というと、これが破れる由縁がありますですね。</p>
00:25:49	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>これも自然界がこんな自然界ではこういうふうに芭蕉を群生してまして、葉が破れるんですね。</p> <p>これどうして破れるかという、やっぱりその芭蕉があるところというのは、大体台風が多いわけです。そうすると台風がやってきますと、その葉っぱが風を真正面に受けてしまうと、もうその、根本から全部倒れてしまうんですね。でもその根元から倒れるのを防ぐために、葉を、破れることによっても風を逃してるわけです。</p> <p>ですから、いわばこう生きるための知恵っていうんでしょうか。そういったもの、この芭蕉を生ける時にですね、何もそのお金がないから千切れた葉しか買えなかったわけではなくてですね、本当に自然の芭蕉の、でも風が吹いて台風が来て倒れようとするのを、知恵で、風を逃がすことによって生きていこうとする、そういう姿を、こういった作品として表してるわけです。</p> <p>多分、見えるところではない背景っていうんでしょうか。或いはその奥にあるものをいかに表現、どういうふうに表現しないんですね。あんまり表現せずに。</p>
00:27:10	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>無い部分が大切なんですね無い所が想像されて、有を感じるっていう。</p>
00:27:18	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そういうことですね。</p> <p>ですから、そういうところは多分ね生け花でも、ほんと想像していただくっていうんでしょうか。見てる方に、どれだけその見えてないところまで感じていただけるかっていうところが、重要というところがありますね。</p>
00:27:35	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>開いた花がガチっと美しいんでなくて、いろんな移ろいがあって、その見えないところの世界を、想像していく。それがみんなで共有できるっていうところがよろしいですよ。</p> <p>結局自然の中で生きてきた人間の感性みたいなものが、この日本の穏やかな四季の移ろいがあるということで、余計そういうものに繋がっていくでしょうね。</p>
00:28:04	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p>



それと生け花だけじゃなくて、これ日本の伝統文化とか伝統芸能、すべて型とか、ルール、起句がありますよね。

今はあの型とかルールというと、何かそれだけでこう、難しいんじゃないかとか、縛られるんじゃないかというふうに、どちらかというとなガティブに捉えられがちな傾向があるかと思うんですけども、わたし型というのはすごく合理的っていうんでしょうか、誰もが共有して共通して認識できる価値観であるとか、美意識がこう、内包されてると思うんですね。

例えば松竹梅、これ私よくあの若い学生さん等にもお話するんですけど、おめでたいお正月おめでたい時に松竹梅で皆さん、それはインプットされてるわけです。

じゃあなぜ松竹梅を生けるのか、なぜ松竹梅を見せたいんですかっていうふうにするのと、もうそこでわからないんですね。もう何となく、松竹梅を見せたいっていうのだけでインプットされてると。

でも、よくよく調べてみますと、松というのは本当に常緑で、常緑ということは、永遠を表すわけです。すべてのものが諸行無常で、花は散ってくし、葉も黄色くなってくけれども、変わらない唯一変わらないものに対する憧れっていうんでしょうか。

永遠を象徴するものは、松であり、そして昔から、祇園祭などでもそうですけど、もう松は依り代でもありますよね。もう一番、位が高い、木でもありました。

それから、竹はまさに五合の竹の子もそうですけれども、もう一雨事にどんどん伸びて、また破竹の勢いという表現がありますけれども、もうどんどん成長していく、上に上に伸びていくそのたくましさがあります。また節があるっていうこともね、きちんと本当に折り目正しいっていうんでしょうか、けじめがあるっていうふうにします。

それから、梅も一番寒い頃に春に先駆けて、香り豊かに馥郁とした香りで咲くということ。

やはりこの松竹梅を取り合わせるということは、そういうふうであって欲しいという、人の願望なんです。草木の実際の姿から人が感じた、人が知った、そうであって欲しいという願望を体現したのがこの花の形というふうになります。

ですから、やはり私たちはただ単に、これはこうだからっていうルールで覚えるだけじゃなくて、その起句の後ろに一体何があるのかどうして、どういう考え方に基づいて、この起句ができたのかとか、こういう型があるのかっていうことを知ると、もっとよりなんか伝統文化や伝統芸能が楽しくなるっていうんでしょうか。

本当に先人からの想いが今の私たちに伝わってくるような、そういうふうにも感じます。

00:31:17

<河村晴久氏>

型というものは、一番初めは全て型から入らなくてははいけませんから、覚えるのが大変なんです。実は、実はそれを覚える体に叩き込むのが大変だけれども、それがきちっと分かるとすごく合理的なものなんです。

どっちの足からどう動くとか、そういうことを私どもの世界にあるんですけども、体重移動すれば当然そうなるとか、動きがどうすれば美しくなるかっていうのは、全部型、

そこに繋がっていくんですよ。

そのがんじがらめでありながら、それがあからこそ、豊かな世界が描けるっていう感じがいたしますね。

その型が無くなれば自由に表現すればと、若いころはすぐ思ってしまうんですけども、逆ですね何にも無し、何でもありは何も無しになるというか、なかなかそういう気がつくのが難しいんですけどもね。でもそのそういう型を極めれば見えてくる世界っていうのが、必ずございます。その合理性っていうか。

00:32:22 <池坊専好氏>

型を学んで型を習得して、そして型から離れてって、守破離ということなんですよ。確かに、私、型っていうのは一つの拠り所みたいなものだと思うんですね。

どうしてその型ができたのかその背景には何があるのかっていうのを考えると、先人の考え方であるとか先人の美意識もわかりますし、意外と生け花でも、いろんな生け方があるんですね。こういった型があってそれに乗っ取らなければいけないものもありますし、それから自由花とって、これは第二次世界大戦以降にできたんですけども、まさにその民主主義が高まっていく中で、先人の美意識に捉われるんじゃないで、本当にその生ける人の個々個人の感性であるとか発想であるとか、そういうふうなものも直接的に表現できる生け方はないだろうかということで、まさにこの自由花というのは型がない自由な生け方なんですよ。

でも意外と、皆さんに接してると、自由花は難しいって言うんですね。つまり、拠り所がないわけです。いったい何を基準にしたらいいのかわからない。もう自分だけで自由にしてもいいって言われても、やっぱり美の基準かわかりにくいですよ。

ですから、本当に型というのは一番その世界に近づくためアプローチするための、とつても一番わかりやすいっていうんでしょうか。そういういわばマニュアルのようなそういう意味合いがあるのではないかと思います。

00:34:03 <河村晴久氏>

自由花もなさり、そしてきちっとした型もあり、結局いろんなその多様性がそこにはあるということなんですよ。

00:34:13 <池坊専好氏>

そうですね、今よく多様性が重要というふうに言われていろんな組織であるとか、いろんな世界でも多様な意見を吸い上げましょうとか、多様な型を活用して、みんなでチーム作りましょうっていうふうになってますけれども、でも日本の伝統文化は、何もその今、多様性という言葉が流行でね、こういう言われる前から、もうすでにこういった表現の中にそれを表してたんですよ。つまり、いろんなありとあらゆる草木のしかもありとあらゆる状態なんですよ。若い芽もあれば、成熟した状態のものもあるし枯れていくのものもあるし、でもどれもが、命として輝いている。そしてそれをとり合わせることによってそれが一つになることによって、和が生まれるという、まさにその和っていう意味の深さっていうんでしょうかね。それを先人が教えてくれてるんじゃないでしょうか。

00:35:19 <河村晴久氏>

そういった教えを今度、次に伝えていかなければならないというところですけども。今の時代です。どうぞございますか昔は、自分で勉強しなさいとか何も言わなくてもそれを、見ていくっていうか、自分で学べていうふうな、根本だとそういうものでしょうね。時間をかけて、長いことかかってこう体得していくっていう感じですけど。

何だか今の時代、忙しくなってくるとこういうその型をきちっとというのが大変な時代になって参りますですね。

00:35:54 <池坊専好氏>

先生のところはどやっぱり、習うというより見て、盗むっていうんでしょうか。

00:36:04 <河村晴久氏>

そう例えば盗めと言われるんですけども、やっぱり教えないと伝わらないという、本当のところはそうです。心意気はその自分で学ばねばっていうのは、それが自発的なものだけは絶対伝わらないんですけども、でもやっぱり教えることが大切ですよね。

00:36:19 <池坊専好氏>

そうですね。やっぱりその社会の状況とか人間関係が変わっても、やはりその師から弟子へやっぱり人を通して、人を介して、学び得ることって非常に大きいと思うんですね。ただ単にテクニックであるとか、生け方だけだったらそれこそ今の方もユーチューブでこうぱっとご覧になって、こういう知識を得るわけですよ。

でも、考えてみると、私たちやっぱり、単にうまく生けるテクニックとか、上手な作品だけを生けることだけが目的じゃなくて、やっぱりそういうことももちろん、それを表現するテクニックがないと、自分が伝えたいこともなかなか十分には伝え切れないわけですけども、でも上手い作品を生けることが最終目的ではありませんので、やっぱりそういったことっていうのは、自分が直接習った先生の本当に姿であるとか、そこで交わされた会話であるとか、そういうことが意外と印象に残ってて、結局何かそういう方々の出会いから得てるものが多いですね。

ただ、やはり今は、芸は盗めとか、或いは先生だから、何でも師に従いなさいというわけにはいきませんので、やはり若い方に伝えるために、うちもいろんな工夫をしています。

その一つが、このインターネット花展なんですけれども、通常花展、生け花をお稽古積みみますと、花展をする、発表会をするというのが一番の私たちの晴れ舞台なわけです。多分、能楽師の方も、舞台をされるというのがそうだと思うんですけども、ただ花展をするというのはこれ、どうしても時間的にも、またお稽古もたくさんしなければいけませんし、また金銭的にもやっぱり稽古する分だけ負担もかかりますので、やはり若い方にはすくなくかなかハードルが高いんですね。

今の方、皆さんお仕事されて忙しかったりとか、また例えば子育てがあつたりとか、或いは介護があつたりとかそれぞれの事情の中でされてるので、何とかその絶対その場に行って、生け花作品を持って参加するというのはなくて、まさにこう家に居ながらですね、或いはどこでももう電車の中からでもこう投稿して、花展ができたらいんじゃないかなということで、考えましたのがこのインターネット花展で、これは今まだ学校に在籍

	<p>している学生さんを対象にしてるんです。</p> <p>そうしますと、これが予想以上に非常に良かったんですね。ていうのはこれ、いかがでしょうかこの作品ご覧になって、何かご感想をいただけたらと思うんですけども。</p>
00:39:27	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>これは靴に、ハイヒールに花が入ってるんですね。</p>
00:39:32	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうなんです。通常ですと、生け花というところを壺でありますとか、いわゆる花器と言われるものに、砂か剣山を置いて生けて、多分その生け花をやればやるほどこういう発想というのは生まれなくなると思うんですね。靴は、はく物だしなんかそこに花を入れるなんてっていう感じで。</p> <p>この方はこのちゃんと水が入るようにですね、靴の中にホルダーみたいなものを、仕込んでまして、これが一番最初に優秀賞を取ったんですけども、通常の、私たちがもう当たり前だと、例えば綺麗に設えられた、花展の会場で、こういう席があってっていう中ではもう、多分考えもしなかった発想の作品が出てきまして、こういうふうな、こちらが逆に設定しないことによって、自由な発想をしてもらえるのも、いいなというふうに思いまして、こういう作品もありました。</p> <p>それから生け花は、どうしてもその女性がするものっていう今はそういうことはないんですけどね。昔はお茶や花っていうと花嫁修業と言われてた時代があったんですね。</p> <p>そうしますとどうしても、生け花はやっぱり今も圧倒的に女性がされてる場合が多いわけですね。ただ、実は女性が生け花の担い手になったというのはそんなに生け花の長い歴史を見ると、古いことではないんですね。</p> <p>次の画像を見ていただくとわかるかと思うんですけども、ずっと生け花の担い手は僧侶だったりとか、公家だったりとか、武士だったりしましたので、明治期の女学校の教育に入れられたことによって、女性がやることが増えたということで、ずっとそれまでは男の方が担い手だったわけですね。</p> <p>今は誰がやってもいいわけですね。花が好き、生け花が好きという方がやっていただけたらいいなと思ひまして、生け花は女性のもの、男性がやるのは恥ずかしいとかですね、何となくこう抵抗があるっていうものではないかといいまして、これをあえて「男花展」というのを打ち出しまして、男性が、遠慮なく自分やりたいことをやれるというふうになったら、この「男花展」もなくなるんじゃないかと思ひますけれども、こういうそれぞれ自分の仕事があるわけですね、こういう生け花を楽しんでいる人たちもいるということも、ぜひお伝えしたいなと思ひております。</p>
00:42:32	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>池坊の大学の方は、能楽はアグリカルチャーで能のクラブがあるので、ずっと参上してましたけれども、共学なんですよ。</p>
00:42:42	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>皆さんも女子校と思ひてらっしゃる方が多いようなんです。</p>
00:42:47	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p>

<p>00:42:52</p>	<p>男性もちゃんと受けられてるわけですね。</p> <p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>それと実はイケノボーイズ (IKENOBOYS) というのも。これ何なのっていうふうに言われるんじゃないかなと思うんですけども。</p> <p>どうしても、伝統文化は、中々敷居が高いとか、或いは中々現代社会の中で、ちょっと違う異質な存在に思われがちなんです。</p> <p>私たちがいろんな、例えばホームページを作ったりとか、それから花展、一番大きなPRとしては花展をしたりとか、そういう従来型の発信ということもしてたんですけども、やはりその世界の魅力を伝えることができるのはやっぱり人、なんです。</p> <p>やっぱりそれをやってる人がとても生き生きとそれを伝えるということが、何よりの発信方法であり、一番他の方にも伝わるということで、これも希望者の方に、こういう生け花をあなたの思い出なそのフィールドで、生け花の魅力を伝えてもらえませんかと言ったところ、彼らが賛同してくれて、それこそイベントをしたりとか、例えば和服ですね。結構街を見ると和服を来て歩いていらっしゃる方多いですけども、和服もやはり業界的にはなかなか厳しい伝統産業の側面もありますので、和服を来てこういう生け花のパフォーマンスなんですけれども、実際着るところが無かったりとか、それからこういうこれは本当に、去年なんですけれども、昔の装束を着て、花を生けたりとか、そういう取り組みもしております。</p> <p>伝統文化なので、どうしても現代社会から離れてるように思われたりとか、特に若い世代には接点が少ないように思われがちなんですけれども、こういう若い世代もそれぞれ頑張っているということをお知らせできたらなというふうに思っております。</p>
<p>00:45:00</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>いろんな取り組みをなさってますですね。</p> <p>このお姿というのは、ほぼ宮中のお姿という感じになりますのですね。</p>
<p>00:45:13</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうなんです。これはですね本当に全部自然素材で染められた装束なんですけれども、私が手に持っているのが見えますでしょうか。</p> <p>昔のお姫様というのは、自分で何かをするってことはなかったそうなんです。</p> <p>何でもこう指図っていうんでしょうか。これをやってくださいこれをしてねっていうふう、周りの方がしてくださるということで、花を生ける時も自分が生けるというよりは、周りの人にこれはこっちとかこういうふう指図をして、花が生けられてたであろうということで、そういった様子の生け方になっております。</p>
<p>00:46:08</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>大学のクラブなんかも教えられて活動になってますですね。</p>
<p>00:46:12</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうですね実は北区はとっても大学が多いところですね。</p> <p>これは二条城で、もう 2019 年ですね二条城が世界遺産登録をされて 25 周年ということで、二条城は今いろんなね、本当に昔の展示だけではなくて、活用っていうんでしょう</p>

か。国の方針もあっていろんな形で活用されて、ライトアップされたりしてるんですけども、このときは、この登録 25 周年記念ということでうちの池坊短期大学の生徒と、それから立命館大学の華道部の学生さんたちが合同で製作して、展示をしました。

その作品がですね次の写真になるんですけども、これは法学部大学の法学部の卒業式などのパーティーで、こうやって花を生けたりとか、それから文化祭ですね。

文化祭のときに、こういった花を生けたりして、ですから若い方が、やっぱり楽しんでいただくと、何か私たちとはまた違った感性なんですね。先ほどの靴の生け花もそうですけれども、こんな発想するのかとか、こういうふうな考え方もあるんだというふうに思いまして、決してなんか文化っていうのは、もちろんその師から弟子という流れはあるわけですけれども、決して知識が上、経験が多い人から、そうじゃない人に一方通行するわけではなくて、逆に初心者だから、若いからこそ、私ができないような、感性もあったり、発想することもあったりするので、やっぱりそういういろんな年代やいろんな感性を持った方々が混じることによって、より成熟して、豊かになっていくんだなっていう。

00:48:27 <河村晴久氏>

本当若い世代の人がこうして次々と新展開していくと素晴らしいですね。

00:48:32 <池坊専好氏>

能の方もねいろんな学生さんとか小さな子たちに。

00:48:41 <河村晴久氏>

そうですね、若い方々も取り組んでられます。ただ、このコロナで本当に大学の活動が難しくなってますね。

クラブ活動ができない。そして、その募集活動ができないっていう、これはもうどうしようもない状態になってますんで、何とか続いて欲しいなと思ってますんですけど。

00:48:57 <池坊専好氏>

そうですね。幾らね、今オンライン配信でとかいうことがありまして、やっぱり臨場感っていうんでしょうか、やっぱり場に行ってみて、生で拝見したりとか、実際自分がやってみて、感じるこつっていうのはとても伝統文化、伝統芸能では大きいと思うんですね。ですからそういった機会もね、今後復活してくるといいなと思います。

00:49:24 <河村晴久氏>

その伝わっていくこと。その心が伝わるということがないでこう自然の中で、こういうしていく、何かこう感じるこつが、次々世代に伝わっていくということが一番大切でしょうね。だから、この次の世代が担ってくださるところへどう繋がっていくかというところの伝統的なものの全ての課題になってくるわけですけれども。

ここの継承ということで言うと、まずその技を伝えるということ、先ほどからの当たり前の話なんですけれども、それとともにやっぱり、花を見て美しいなあという、こういうことを感じてもらえるような環境に、北区っていうのは本当に、山もあり、川もあり、すばらしい環境で花も今、鴨川が素晴らしいですよ、近所歩くだけでも、それこそ心がときめくんですけどもね。

こういう経験をまた若い人にしてもらえる機会、感じてもらう機会すらどんどんでき

<p>00:50:33</p>	<p>ていくといいなあというふうに常に思ってます。</p> <p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>生け花もね、どうしてもうまく生けるとか、技術を身につけるとか、そういう方に走りがちなんですけれども、その出発点っていうやっぱり花を見て美しいと思う気持ちだと思っと思うんですね。</p> <p>或いは例えば私たち本当に堤防とかに行っても、何かそれまで本当に硬かった蕾がちょっとこう緩みかけて、もうすぐ咲くんだなと思うだけで、何かこう、応援したくなるっていうのはちょっと気持ちが明るくなるじゃないですか、嫌なことがあっても、だからやっぱりそういう気持ちが生け花の出発点であって、ただ単に必要なだからやるとかね、これ、うまく生けるための技術だからって思ってしまうとこんなつまらないっていうか、味気ないことはないわけで、やっぱり最初の出発点ってのおそらく、仏様にこの美しい花を、見ていただきたいと、そして多分その自分が感動した花を、じゃあ今度は家の中に取り込んで、自分の家族であるとか自分の友人であるとか、自分の近い人にも、この自分が見たときの感動であるとか喜びを伝えたいっていう、本当にある意味素朴なっていうんでしょうかね。人としての心の動きだったと思うんですね。</p> <p>ですから、伝統文化や伝統芸のいろんな継承するために或いは広げていくためにいろんな施策がされてますけれども、やっぱりその根っこにある、何かこう、感動する心であるとか、実際自分がこう体験したことによって得た、驚きとか、ちょっと衝撃とか、何かそういう感受性っていうのをなくしては、ただただその形だけをなぞっていても、本当のところは伝わりきらないじゃないんじゃないかなというふうに思いますよね。</p>
<p>00:52:29</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>感動をすることと表現することってこれ、人間の一番根本でしょうね。AIがどんどん発達しても、AIは感動しないと思うのですが、どうなんでしょうね科学者の方のご意見はまた違うかもしれませんけれども、これは人間しかできないんじゃないかと、こういうのを携わってる人間としては思いますけどね。</p> <p>だからその技の部分っていうのは確かに、機械にAIに覚え込ませば担えるけれども、感動したことそれを表現した喜び感動、何らかの形でこう表すっていうのは、これがなくなると人間でなくなるなというふうなそういうふうに思いますんです。</p>
<p>00:53:10</p>	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>この頃どうなんでしょうか、能の世界でもモーションキャプチャーとかこうつけて動きをこう計って、本当にプロフェッショナルの動きを留めておくようにっていうようなこともされてるっていうふうにされてますね。</p>
<p>00:53:28</p>	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>技術的にいろんな記録ができますし、そういうものもあります。</p> <p>また、実際に私自身もバーチャルリアリティ、眼鏡をはめて見るような映像を撮ったり、そういうこともしてますんですね。</p> <p>これは、方便というか、使えるものは何でも使おうと。</p> <p>それこそインターネットを使えば世界中が繋がって、全然こう来れない方でも見てい</p>

00:54:31	<p>ただけるっていうのがあるから、使えるものは使いたんだけど、あくまでそれも方便の世界であって、実際は違いますね。そして、移しっていう問題があって、能面でも、古いすごいものを新しく作るコピーを作る。すると、絶対今の方が、道具もいい研究を進んでる技術も高い。ところが、作ったものを並べてみれば、おんなじように見えても、実際舞台の上で使うと、古いものにある力が無いんですね、新しいものには。</p> <p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>やっぱりそうそれはこう、感じられるものなんですよ。</p>
00:54:37	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>その同じように見えてても、中から来るものが違う。</p> <p>私自身も能面作りを習ったことがあって、自分で能面を打ったことはあるんですけども、真似をすると。ノミに力が入らないんです。</p> <p>本物はズバツとこう行くわけですね。そうすると中からぐっと力がいくという、だから表面なぞっても何もならないですよ。いや、これあらゆるものを同じことじゃないかなあとと思うんですけども、生けてられるの本当そのものの持つ力をこうブワツとこうなさせてこそで、例えば今のお写真を見てお手本があるからぐちゃぐちゃと弄くっても仕方ないでしょうな、同じようなこと。</p>
00:55:21	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>そうですね。本当にこれだけねA Iとか人工知能っていうのが、発達すると多分このいわゆる名作と言われるような、絵図でありますとか、今、すばらしい皆さん作品をこうデータにして、生けたらきっと最高傑作が生まれると思うんですね。</p> <p>でも、じゃあそれは最高傑作なんだろうけれども、それを見て人は感動するんだろうかとか。或いは、その一方で生け花の付加価値っていうんでしょうか例えば少なくとも、自分の子供が一生懸命、母の日に生けてくれた花の方がとっても心に響いたりとか、だからそういうことを考えると、何か文化って何だろうとか芸術って何だろうとか、やっぱり自分が伝えたいことを表現するために、テクニックは必要なわけですけども、でもそれだけではやっぱり終わらないっていうんでしょうか、生身の人間が関わるからこそ、生まれるなんか醍醐味であったりとか、予測不可能なところに、本当はすごく魅力があるんじゃないかなと。</p>
00:56:37	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>一番大切なところですね。例えば粋があって舞台を出るときでも、能面付けてるとお客さん見えてないんですけども、お互いの気迫が伝わりますよね。</p> <p>こちらが頑張れば、向こうからも返ってくると。見えてなくてもあるんです。それ科学的に計測できるような問題かもしれませんが、あるから舞台で成立します。</p> <p>だから、お花が一つあると、その場の空気が違いますよね。そういう体験ができれば、幸せですね。そして、それを体験して次の世代の人たちに伝えていく。これが一番大きな課題なんだなあということを思いますね。</p>
00:57:20	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>伝統文化とか伝統芸能と言うと何かこう特殊な文化そのものがやっぱり文化を伝える</p>



って、何かすごく荷が重いつていうんでしょうかね。なんかすごく特殊な環境の人がそれをできるつていうふうに思われがちなんですけれども、私は本当はそうではなくて、もう誰もが文化の継承者であり伝承者だと思うんですね。

例えばいろんなイベントがある中で、今日は能を見に行こうとか、或いは能楽師が着ているあれはどういうものからなってるんだらうとか、それから鴨川を歩いたときに、今はどんな花がこの時期に咲いてるんだらうとか、やっぱり一つ一つ私たちの行動つて、結局私たちの選択によって成り立ってるわけですから、そういうふうなことを考えると、本当にささやかなことに見える、何か選択が意外とそのなんか周りの人に影響をおよぼしてたりとか、意外とそういうことが何か誰かの心に引っかかってたりとか、してるんじゃないかなと思うんですね。

ですから、せつかく北区はこれだけ豊かな自然があつて、ちょっと歩いたら桜があるとかお寺があるとか、大学があるとか。こういう環境つていうのは、本当にこう変えがたい。

ですから、またそこから私たちが得るエネルギーも大きいわけですから、ぜひ、そういった私たちが得たエネルギーを、また自分たちの選択によって、周りに文化として伝えていけたらなというふうに願います。

00:59:02

<河村晴久氏>

この間のその去年からこちらの講座でさせていただいている「ご近所の能」つていうそういうシリーズにしましても、雲林院にしましても、いろんなところもう千年からの歴史のあるようなものがあるんですね。

これ日本のお花もこうして続してる、能も続いている。続いているつていう、この魅力。だから、その新しいものを作る創作することの努力つて大変なものはいるんですけども、積み重ねてきたもの、曩祖のありがたさというか、5年10年やれば、20年30年かかっても、600年分500年分のは全部分かってしまうという技術を身に付けることはこんなありがたい事ないですよ。

00:59:51

<池坊専好氏>

ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲がね、書いた文章の中に、日本というのは本当に、いろんな小さな家の軒先にも花を飾ったりとか、あるいは家の中にも花を飾ったりして、そういう一部の芸術家だけじゃなくて、そういった光景がまちまちに、全国面にあるというところが、すごく魅力的で素晴らしいつてことを書いてるんですね。

生け花つていうのは、伝統文化でもあるんだけど、これ生活文化でもあつて、何も1人の家元だけが一生懸命旗を振ってたわけじゃなくて、花を生けるという営みを、全国の人が、自分たちの生活の中でやっていたからこそ、ここまで廃れることもなく続いてきたわけですね。

そういったことを、じゃあどうして能もそうですし、生け花が続いてきたんだらうということを見ると、やっぱりこれ、目に見える、形がないからだと思うんですね。

例えば、陶芸の作品だったらそれをそのまま、保管することができるわけです。

でも、もう生け花もう本当にもうその時だけなんですよ。

瞬間なんですよ。でもその人が、生きてる時しかそれを生けられないわけですよ。も

ちろんその江戸時代の名士って言われる人の絵図は残ってますし、それを復元、いろんな人が解釈して、復元をしてるわけですけども、でも果たしてそれが本当にその人が生けたように、再現できてるかっていうと、それは推測がかなり加味されてて、わからないわけ。

ですから消えてしまうものっていうのは、逆に消えてしまうものに対して、あの人はやっぱりここで自分が頑張らないとっていうなんかそういう強い責任感っていうんでしょうかね。意識が消えてしまうからこそ、それをまず伝え方としては人から人へしか伝わらないわけですよ。幾らノートに書いたりとか幾ら、帳面に書いても、幾らそれをDVDに落としても、わからないところはいっぱいあるわけですから、だからそういったことではやっぱり今、とつてもアナログな方法かもしれないけれども、人から人へ、そして、継承したい守りたい伝えたいっていう、意識の総決算でいうんでしょうか、寄り集まったもので、今になってるんじゃないでしょうかね。

01:02:36 <河村晴久氏>

問題は、今なんですよ。いつの時代の人にとつても、今。

01:02:44 <池坊専好氏>

そうですね。今、非常に重要で、続いてきたということは、結局その時代の洗礼を受けてきたっていう、幾らこれ古いからとか、何百年歴史がありますからとか、日本の伝統ですかって言われても、やっぱり今の人が、どこか心に響くところがなかったりとか、或いは、なぜご自分が心に引かかるものがなかったら、人はいいからっていう頭、知識だけでは、やっぱりこう動けないと思うんですね。

わたくしも実は生け花ってじゃ何だろうというのを考えたときに、いろんな表現があるなっていうことを感じまして、実は、いろんな取り組みもしてるんですけども。

その一つは、このサマー・アート・ジャパンという、これは、飛躍する日本の美、東京藝術大学とのコラボレーションでして、この私の瞳から光が出ておりますけれども、これは私が、どこを見て、花を生けるときにどこを見て、花を生けてるのかっていうこの計測してるんですね。

あんまり自分では見るとか意識してないんですけども、熟練の人、生け花のキャリアの長い人と、それからそうでない人は、一つの作品を仕上げる時にですね、視線の動かし方、見てるポイントがおそらく違うんじゃないかという、そういう仮説にのっとりまして、これ私が見たところを刺すというそういう試みをしまして、こういった音楽と合わせて、こういったこともしております。

01:04:38 <河村晴久氏>

どんな感じ見てられるところが、全体を見渡しつつ、かつ無駄なく見てられるという感じになりますですか。

01:04:45 <池坊専好氏>

生け花の経験が長い方は全体をこう、何か捉えてるんですね。

つい私たちは一生懸命だと、ちょっと前のめりに、その部分も気になる部分を見ようとするじゃないですか。

やはり経験が浅い方というのは自分が気になるころをどうしても見がちになるんですけれども、経験が長い方というのは、結構生け花作品全体を見て、全体それぞれの部位がどういうふうにも有機的に働いてるかっていうのを、その探っているという、そういうふうなことがわかりました。

それから、またこういった次ですね、これもさっきの枯れた花にも華があるに近いんですけれども、枯れた蓮を使いまして、これもどうしてこんな枯れているものをわざわざ展示するんだらうということになるんですけれども、こういった枯れたものの美しさ、それからこれは先ほど蓮の立花を見ていただきましたね蓮一色の、あれを実はこう枯れた葉ばかりで分解して生け変えた再構築したものです。

先ほどの蓮一色は立花という古典的な形式だったんですけれども、それを分解して再構築して、そしてまた、あえて枯れた葉を持ってくるっていうことで、これは自由花という立花から自由花への展開というこういうこともしたりとかですね。

それから、次のような、これが砂のものということなんですけれども、生け花の世界では、この常緑の松にこの枯れた竹ですね。ちょっと煤の見えるすでしょうか、黄色い花の後ろにあります。

こういうのを生けるっていうのは、割と自然なことなんです。

ただ、現代アートの方に言わせると、西洋では、ある国は大抵の国が一神教であると。

こういうふうにも二つのものが並び立つという、基本的には一つのもものが主体であり、あとが脇役っていうんでしょうか、廢材的あるのに対して、二つのものを両立するということが、とってその方は西洋的な視点から見ると興味深いというお話をされてます。

こういったことも、生け花人としてはここ今までの経緯から当たり前やってることなんですけれども、見方を変えると、そういった二つの全く異なるものを並び立てることが可能であるというところが、面白いてふうにされたりとか。

それから次もですね、映画からインスピレーションを得て、それに合う作品を生けたりとか、実は、もう生け花ってなんだらうと自分でも思うぐらい、いろんなことをやっております。

もちろんその昔からある、建て花から始まった生け花、そして床の間に飾られる生け花、花展で飾られる生け花、それもととても大切なことですし、伝えるべきことなんですけれども、こういうこと、これは映画とそれから、こういったプロジェクションマッピングのような照明ですね。テクノロジーによって生み出された世界感と生け花の融合ということで、こういったことも今じゃないとできないことなんです。

多分これもまた、何年も何年も経ったらこれもレトロになってしまうと思うんですけれども。ですから、まさに今を捉えるということで今でなければできないことにも、挑戦していくそれが成功するのか失敗するのかわかりませんが、挑戦する原点を守りつつも、挑戦するというのも、今に生きているものの使命の一つかなというふうに思っています。

01:09:06

<河村晴久氏>

常に創作活動ということですね。

01:09:12	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>能の方はいかがなんでしょうか新作能は。</p>
01:09:14	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>新作能も多いですねこの頃。まさに一昨日も、媽祖－MASO－というのもございましたけどね。</p> <p>何度も何度も繰り返して磨き上げていくということが大変大事なんですけれども、新作能に取り組むとその創作の苦しみ、創作の体験っていう、600年前に作っていたその体験ができるわけですよ。それがないと、守りになると、滅びますね。</p> <p>常に新しいことに挑戦するという力は大事ですよ。</p> <p>もう本当にまさにそういうことですね時代に即応して次々とか新しい展開を作っていくっていう。</p>
01:10:00	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>その新作能っていうのはこのコロナ禍の中で、何かそういった状況を克服するための能なんでしょうか。</p>
01:10:09	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>平和の祈りを含めたそういう曲をまさに作っておられますんですよ。</p> <p>コロナになって作られる能もございましたし、祈り、本当に祈りの能ですね。</p>
01:10:25	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>クラウドファンディングでも非常に好評を博したということで、それだけ多くの方が、いわばなかなかこう、伝統芸能に接点がない普段はない方が、逆に興味を持ってくださったりとか。</p>
01:10:39	<p>&lt;河村晴久氏&gt;</p> <p>心を寄せていただけて、できた能なのでね。</p> <p>だから、本当にこのいろんな方々にこう触れていただける機会がこれからお花もそうだし、他の伝統芸能もそうですね。</p> <p>決してその、他所にある関係ないというわけではなくって身近にあるものというふうになってきたらよろしいですね。</p> <p>まさにお花と生活そのものに関わる心豊かに生きていけるものでございますわね。</p>
01:11:05	<p>&lt;池坊専好氏&gt;</p> <p>本当にその花を見てほっとしたりとか、それから、ちょっとでも明るい気持ちになったりとか、或いは花を見て、誰かを思うっていうんでしょうか。</p> <p>そういう経験って、おありの方多いんじゃないかなと思うんですね。</p> <p>例えばこのときのお花は誰々と一緒に行ったとか、家族の誰かと行ったとか、そういう思いでも多分皆さんお持ちだと思うので、ぜひ花を見て、そういう気持ちを持って、少しでも何か心が和んだり、或いは、自分のことだけじゃなくて自分以外の誰かを思う。そういうひとときが時間が瞬間でも生まれたら、何かそういう小さなところから、「WA」が繋がっていくっていう、その「WA」が広がっていくんじゃないかなというふうに思っています。</p>

01:12:09

<河村晴久氏>

ありがとうございます。

生け花っていうとまず形を思ってしまうのでね。専応口伝を読ませていただきましたけど、そういう議論をまず学ばなければ始まらないというふうに思ってますけど。

もちろん根本はそうだけれども本当にこう感じる心を持って喜び感動があってっていう、身近にこう感じるお話を今日はいろいろ伺わせていただきまして大変勉強になりました。ありがとうございます。

北区、こうした美しいお花もたくさんある自然もたくさんある、是非ともこれから私もそういうものを楽しんで、心豊かに生きていきたい。どうしても忙しくバタバタするんですけどね。その中で豊かに行きたいなということを思います。

今日本当にいいお話を伺わせていただきまして、どうもありがとうございました。

次のパワーポイントをまた送っていただけますでしょうか。これからのご案内になりますんですけども。

この講座は、2ヶ月ごと偶数月の第1火曜日の夜6時半から、ちょうど同じパターンでございますけれども、次々といろんなゲストの方をお招きしてお話を伺うというこういう形になっております。

ゲストの皆さんは北区におられる方々、すぐ近所におられる方々なんですけれども、それぞれいろんな世界を持っておられる。

そして、これがですねなかなか、お話伺うことだってこんな方がご近所におられるってことはわからないんですよ。そこのところがこの講座でもって繋がって、いろんな方がおられる。そして、全然別世界と思っていたことがこんなに近くで、文化っていうものに繋がっていけるんだなということを感じていただきたい。

日本のものそして今池坊さんのお話にあったのは全部「WA」に繋がっていくという、そういうことを目指していく講座でございますので、是非ともこれからまたご聴講をいただけたらと思います。

こうして対面でここへお越しいただく方法もありますし、これをオンラインで聞いていただくこともできます。そしてまた、京都市の方のYouTubeチャンネルで、これは後日、オンデマンド配信というものもございますので、後々聞いていただくこともできます。

文化庁が移転するのを記念して、文化に親しんでいただければ身近に文化があるというそういう体験ができたらということの思いで始まった講座でございますのでどうぞこれからもよろしく願いいたします。

今日はお世話になりました。ありがとうございます。

01:14:52

<池坊専好氏>

ありがとうございます。

01:14:54

<河村晴久氏>

皆様ご聴講どうもありがとうございました。